

古典語の「スル」覚書：補助動詞と軽動詞

青木，博史
九州大学人文科学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/7325729>

出版情報：語文研究. 135, pp.75-63, 2023-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



古典語の「スル」覚書

— 補助動詞と軽動詞 —

青 木 博 史

1. はじめに

小田（2015：54-55）では、古典語における「補助動詞」として、以下の6つの形式が認められている。

- (1) a. 動詞に付いて敬譲の意を表すもの
b. 断定の助動詞の下に付く「あり」
c. 形容詞・形容動詞・「べし」・「ず」の下に付く「あり」
d. 助詞を介して動詞の下に付く「す」
e. 「て」「つつ」を介して動詞の下に付く「あり」
f. 「て」を介して動詞の下に付く「みる」など

それぞれに対応する用例を、以下に（2）として掲げておく。

- (2) a. かぐや姫、いといたく泣き給ふ（竹取）
b. 時は五月になむありける（伊勢・43段）
c. つれもなくあるらむ人を片思ひに我は思へば苦しくもあるか（万717）
d. 起きもせず寝もせで夜を明かしては（古今616）
e. かくさし籠めてありとも、かの国の人來ば、みな開きなむとす（竹取）
f. 女もしてみむとてするなり（土佐）

（1a）および（1f）については、青木（2020）でもこれを「補助動詞」と認めた。元の動詞の語彙的意味が薄れ、機能語的に振る舞うようになったものを指して補助動詞と呼び、連用形に後接する補助動詞と、テ形に後接する補助動詞の2種が認められるという立場を示したものである。したがって、（1b、c、e）の「あり」を補助動詞と呼ぶことも問題ないように思う。これらの「あり」は、本動詞における「存在」という意味は薄れ、機能語的なものとして振る舞っている。

こうした立場からすると、（1d）の「す」はどうであろうか。確かに、（2d）において「ず」「で」で打ち消される動詞の意味は「起き」「寝」で表されてお

り、「す」は係助詞「も」が介入したために必要とされた形式であって、やはり機能語的である。断定の「なり」や形容詞述語を係助詞で分割することによって必要とされる「あり」(=2b, c)を補助動詞とするなら、ここでの「す」もやはり補助動詞と呼んでよさそうである。しかし、そうすると気になるのは、次に掲げるような、動詞連用形に後接する「す」である。

- (3) a. 柳こそ伐れば生えすれ世の人の恋に死なむをいかにせよとそ (万3491)
b. 山隠れ消えせぬ雪のわびしきは君まつの葉にかかりてぞふる (後撰1073)

上に (3) として掲げた例は、小田 (2015 : 58) で「軽動詞」の項に挙げられるものである。小田著では、「現代語で「もっちりとした食感」「彼女は青い目をしている」などの「する」を「軽動詞」と呼ぶことがある」と述べられた後、「里びたる声したる犬ども (源氏・浮舟)」「幼気したる小女房 (平家・6)」の例が挙げられるが、これらは「青い目をしている」の古代語の例として挙げられたものである。これに続いて、「動詞を「動詞の連用形+す」の形で用いることがある」と述べられた後に (3) の例が挙げられるので、小田著ではこれらは「軽動詞」として、「補助動詞」とは異なるものと見ているようである。

しかし、(3) の「す」にしても、本動詞が表す実質的意味を表してはいない。小田著でも (3a) は「生えすれく (生ゆれ)」と記されるように、「す」は強調的意味を添える形で動詞連用形に後接している。また、(1c) の「あり」は「形容詞・形容動詞などの下に付く」というものであるが、実際は (2c) の「なくあるらむ」「苦しくもあるか」のように、係助詞が介入する場合もあればない場合もある。これは、(1f) の「テ形補助動詞」が、「行ってみた」「行ってはみたが」のように、係助詞が介入する場合もあればない場合もあることと並行的である。したがって、動詞連用形に後接する「す」の場合に限り、「助詞を介して付く」もののみを「補助動詞」とし、助詞を介さない場合は「軽動詞」とするのであれば、いくらかの説明が必要であろうと思う。本稿では、まずこの点について考えてみたい。

また、「軽動詞」という用語であるが、現代語研究ではしばしば目にするものであり、たとえば、加藤重広『日本語文法 入門ハンドブック』(研究社、2006年)には、次のように記載されている (一部省略)。

- (4) サ変動詞「する」は、本来「やる・行う」の意の他動詞であるが、漢語などについてサ変複合動詞を作るほかに、「何らかの動作・行為を行う」の意

の他動詞と考えられない用法を持つ。

- ・花子は切れ長の目をしている。
- ・この床はべたべた（と）している。
- ・ぱりぱりとした食感
- ・次郎は振り返りもせずに行ってしまった。
- ・明かりをつけて、部屋を明るくしてくれ。

この場合のスルは、表現上必要とされる形態であって、他動詞としての本来のスルの語彙的意味が後退している。このようなスルを軽動詞と呼ぶ。

「本来のスルの語彙的意味が後退している」ものであり、したがって「やる」に置き換えられない（「勉強をしている」は「勉強をやっている」に置き換え可能）、といった説明が行われている。

「切れ長の目をしている」「べたべた（と）している」の類は、すでに見たように、小田（2015）でも「軽動詞」として扱われるものであるが、「振り返りもせず」の「スル」は、「補助動詞」という扱いになっており、(4)の記述とは異なっている。この点については、どのように考えるべきであろうか。また、「軽動詞」の用語は、「出張（を）する」のような「動名詞＋スル」について用いられることも多い。古代語にも「船出をする（万3627）」のような例は存するが、小田著ではこれについての言及はない。

このように、「軽動詞」「補助動詞」の用語は、ともに「本来の動詞の語彙的意味が薄れたもの」という規定になっており、その外延は定まっていない。本稿では、古典語の「スル」について、「補助動詞」あるいは「軽動詞」という観点から、あらためてその意味・用法について考えてみたい。そのためには、「スル」という語の「本来の」語彙的意味を考える必要があるだろう。基本的な語である「スル」については記述の蓄積も多いが、その全体像をふまえたうえで、「補助動詞／軽動詞」の問題について考えてみたいと思う。

2. 補助動詞「スル」

まずは、上代における「動詞連用形＋スル」の例から検討しよう。『万葉集』における用例を、以下に(5)として掲げる。

- (5) a. 明日香川明日だに見むと思へやも我が大君の御名忘れせぬ（万198）
- b. 常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれあどか絶えせむ（万3397）
- c. 柳こそ伐れば生えすれ世の人の恋に死なむをいかにせよとそ（万3491：3a）

コーパス検索アプリケーション「中納言」を利用して、『日本語歴史コーパス (CHJ)』奈良時代編の『万葉集』における「動詞連用形+スル」を検索したところ、^(注2)「忘れ+す」2例、「絶え+す」3例、「生え+す」1例、以上6例（異なり語数3語）が用いられていた。

用例が少ないため決定的なことは言いにくいですが、いずれも打消し、あるいは否定的な文脈で用いられていることが見てとれる。(5a) は打消しの「ず」に続いたもの、(5b, c) は「こそ…ば～すれ」の形での逆接と、「か～せむ」の形で反語であり、こうした否定的意味を強調する形で「す」が用いられている。

それでは、同じく『万葉集』における「動詞連用形+係助詞+スル」の例を見てみよう。以下に (6) として用例を掲げる。

- (6) a. 老いもせず死にもせずして永き世にありけるものを (万1740)
- b. 紅の八入の衣朝な朝ななれはすれどもいやめづらしも (万2623)
- c. 片糸もち貫きたる玉の緒を弱み乱れやしなむ人の知るべく (万2791)
- d. 悩ましけ人妻かもよ漕ぐ船の忘れはせないや思ひ増すに (万3557)

やはり用例は少ないものの、これについても、いずれも否定的な文脈で用いられていることが分かる。打消しや逆接、そして反語と、(5) とまったく同じ用法で用いられている。さらに注目すべきは、前接する動詞語彙である。動詞連用形に直接する場合の異なり語はすでに示した通り「忘れ／絶え／生え」の3語であるが、係助詞を介して後接する場合の異なり語は、「老い／死に／馴れ／乱れ／忘れ」の5語である。すなわち、一見して分かるように、いずれも無意志的な非対格自動詞に限られる点で共通している。^(注3)

前節の (1b) では、「補助動詞」として、断定の助動詞に付く「あり」を示した。このとき、コピュラの「なり」を分割する形で、「ナリ連用形+あり」の場合と「ナリ連用形+係助詞+あり」の場合とがあるが、どちらの「あり」も、その働きは等しい。

- (7) a. 我が背子をこち巨勢山と人は言へど君も来まさず山の名にあらし (万1097)
- b. 家島は名にこそありけれ海原を我が恋ひ来つる妹もあらなくに (万3718)
- (8) a. 恋するに死するものにあらませば我が身は千度死に反らまし (万2390)
- b. 妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにぞありける (万3591)

上の (7) (8) では、係助詞が介入した場合とそうでない場合の対応を示したが、これは (5) (6) の対応とまったく並行的であると言える。すなわち、「ナ

り連用形+あり」と「ナリ連用形+係+あり」の「あり」を同じ「補助動詞」と認め、「動詞連用形+係+す」の「す」を「補助動詞」と認めるのであれば、これと同じ働きをする「動詞連用形+す」における「す」も、同じく「補助動詞」とすべきではないかと考えられる。

それでは、時代を下り、中古における「動詞連用形+スル」を観察しよう。以下に(9)として、用例をいくつか掲げる。

- (9) a. かかることを尽きせずながむるほどに(蜻蛉・巻下)
b. 絶えせぬ仲の御契り、おろかなるまじきものなればにや(源氏・篝火)
c. 露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋のひさしかるべく(古今270)
d. 「まだ死にせぬ御身なれば、またや見たまはむ」と(落窪・巻2)

奈良時代と同様に、「中納言」を用いて『CHJ』平安時代編における「動詞連用形+スル」を検索したところ、「尽きす」80例、「絶えす」7例、「朽ちす」2例、「老いす」2例、「死にす」2例、「消えす」1例、「旧りす」1例、を拾うことができた。

まず気づかれることは、すべての例が打消しに続いているという点である。上代では、逆接条件や反語などの用例も見られたが、中古では打消し表現に固定化している。また、前接する動詞は、上代同様、非対格自動詞に限られている。中でも「尽きす」の形は非常に多く見られ、古語辞典の類ではこれを見出し語として掲げるものも多い。すなわち、動詞連用形に直接する補助動詞「す」は、中古においてはもはや語彙化しており、さらに用法も打消し表現にのみ用いられるというように、慣用句化していると言える。

それでは、助詞を介して後接する「動詞連用形+係+スル」はどのように用いられているだろうか。(10)として、いくつか用例を掲げる。

- (10) a. 鏡山いざ立ち寄りて見てゆかむ年経ぬる身は老いやしぬると(古今・仮名序)
b. 富士の山辺の煙にはふすぶることの絶えもせず(蜻蛉・巻上)
c. 逢坂の関に流るる岩清水いはで心に思ひこそすれ(古今537)
d. ふるさとのたびねの夢に見えつるは恨みやすらむまたとはねば(大和・2段)
e. いでていなば心かるしといひやせむ世のありさまを人はしらねば(伊勢・21段)

(10a、b) のように「老い」「絶え」のような非対格自動詞に続く場合もあるが、(10c、d、e) のように「思ひ」「恨み」「言ひ」のような他動詞に続く例もしばしば見られる。また、上代では、打消しや逆接条件など否定的な文脈のみで用いられていたが、(10c、d、e) のように、いわゆる強調や疑問の例も多い。したがって、「動詞連用形＋係＋スル」という形における補助動詞「す」は、上代から中古にかけて用法を広げていると言える。また、補助動詞「す」は、中古に至ると、助詞を介する場合とそうでない場合において、歩みを異にするようになったということも言えるだろう。^(注4)

このような補助動詞「す」は、複合動詞後項として捉えることができる。複合動詞後項としての補助動詞も、助詞を介さない場合もあれば、助詞を介して後接する場合もある。

(11) a. 岩根ふみ重なる山にあらねどもあはぬ日おほく恋ひわたるかな (伊勢・74段)

b. されど、「などでかさらにもものすべき」と言ひ果てつれば (蜻蛉・巻中)

(12) a. 秋霧のともに立ちいでて別れなばはれぬ思ひに恋ひやわたらむ (古今386)

b. かはと見てゆかぬ心をながむればいとどゆゆしくいひやはつべき (蜻蛉・巻上)

「～わたる」「～はつ」はアスペクト的意味を表す補助動詞と見てよいものであるが(注1参照)、(11) のように動詞連用形に直接する場合もあれば、(12) のように助詞を介して動詞連用形に後接する場合もあることが見てとれよう。^(注5)

このように、古代語における複合動詞は係助詞の介入を許すのであるが、中世期に至ると、助詞が介入した「動詞連用形＋係助詞＋動詞」の形は、打消し句の中での使用にほぼ限られるようになる^(注6) (青木2013)。

(13) a. 「是こそそよ」といひもあへず、手にもてる物を投げ捨てて (平家・巻3)

b. 物を参らせたれども、御覧じも入れられず (天草平家・巻4-19)

c. 中へおもひもよらぬおふるまひで御ざる (虎明狂言・饅頭)

(13a) には中世前期、(13b、c) には中世後期の例を掲げた。特に中世後期では、『CHJ』室町時代編に拠ると、161例中151例が打消しを伴うものであった。この頃にイディオム化して現代語へと続いていくが、複合動詞後項が「す」の場合も同様である。

- (14) a. 入道相国をちやうどにらまへて、まだたきもせず（平家・巻5）
 b. いや―物をくはずはいきはせまひぞ（虎明狂言・宝の槌）

3. 本動詞「スル」

前節では、複合動詞後項の「す」を「補助動詞」とし、古典語の様相について観察した。本節ではこれを承け、これ以外の用法についてはひとまず「本動詞」とし、観察していくこととする。

まずは、他動詞の「スル」から見ていこう。古典語では、目的格を示す格助詞「を」は省略されることが多いが、後で述べることと関わってくるので、格助詞が標示されたもののみ取り上げることとする。上代・中古の用例をいくつか掲げておく。

- (15) a. 天の香具山登り立ち国見をすれば国原は煙立ち立つ（万2）
 b. 鉢を門に捨てて、この歌の返しをす（竹取）
 c. いかなる盗人のかかるわざをし出でつらむ（落窪・巻1）

(15a) は香具山に登って四方を觀望する行事、(15b) はかくや姫の歌への返歌、(15c) は姫君の元に男が通うこと、そうした行為を「行う」ことが「す」によって表されている。動作主の意志的な動作であり、典型的な他動詞の用法と言えよう。

ヲ格にいわゆる動名詞（verbal noun）が用いられる例も、古代語の段階ですで見られる。中古和文における和語の例（16a、b）、院政期の和漢混淆文における漢語の例（16c、d）を、それぞれ掲げておこう。

- (16) a. 見れば率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし（伊勢・6段）
 b. 身ぶるひをし、頭ふり、口わきをさへ引き垂れて（枕・26段）
 c. 何計ノ寺ナレバ、我レニ対テ論義ヲセム為ナラム（今昔・巻11-2）
 d. 只自害ヲセムト思テ、先ヅ毒ヲ取テ子孫ニ令服テ（今昔・巻20-27）

「スル」はこのように、広く動作一般を表しうるので、様々な事象を表す動名詞をヲ格にとることができる。^(注7)この他にも、「…を～にす」の形で「…を～として位置づける」意（中村（2022：355-376））や、「…を～と思う」意を表すなど、その用法は広い。

- (17) a. らうたげに見えしを、身近く使ふ人にせむ（源氏・帚木）

- b. ちごをわりなうらうたきものにしたまふ御心なれば（源氏・松風）

ただし、こうした他動詞としての用法は、現代語の感覚からしても比較的理解しやすいものと思う。注目すべきは、以下に掲げるような自動詞としての用法である。

- (18) a. ますらをの軀の音すなりもののふの大臣楯立つらしも（万76）
b. 空よりも落ちぬべき心地する、と書き置く（竹取）
c. 五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（伊勢・60段）

古典語では主節の主格は助詞が標示されないので文意から判断するしかないが、(18a、b) が「音ガ+スル」「心地ガ+スル」の意であることは明らかであろう。(18c) は係助詞が標示されたものであるが、こちらも「香ガ+スル」と解釈して問題ないであろう。「スル」は名詞が表す事態の「状態」を表していると考えられる。

主語である名詞の状態を、形容詞述語によって表す場合もある。「名詞+形容詞連用形+スル」という形である。

- (19) a. ひとりのみ着寝る衣の紐解かば誰かも結はむ家遠くして（万3715）
b. 病いとおもくしておこたりたるころなり（大和・119段）
c. 帯刀が心地あしうしければ、〈しばし〉と思ひて入りにけり（落窪・巻1）
d. 心極テ猛クシテ思量り賢キ者ニテ有ケレバ（今昔・巻11-6）

多くは(19a、b)のように「～して」の形であり、「して」を接続助詞と見る立場もある。後に、「形容詞連用形+して」の形は、(19d)のような漢文訓読文にも引き継がれていく。いずれにしても、「スル」は主語の状態を表すのであるから、自動詞と言ってよい。

さらに、上の(19)の形容詞連用形の部分が、擬態語副詞で表される場合もある。

- (20) a. 文はこぼれぬばかりして、固文の表袴つやつやとして（蜻蛉・巻下）
b. 髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして（源氏・若紫）
c. 女房はいふにも堪へず、くたくたとして寄り臥しにけり（宇治・巻3-2）

(20)の諸例では、「表袴」「髪」「女房」の状態が、「つやつやと」「ゆらゆらと」「くたくたと」した状態である、と述べられている。「スル」の用法としては、

やはり自動詞としての用法であると言えるだろう。

ここで注目されるのが、このような「擬態語＋スル」の形式である。古代語では、(20)のように「擬態語＋ト＋スル」の形であるが、近代語以降、「と」が脱落した「擬態語＋ ϕ ＋スル」の形が多く用いられるようになる。

(21) a. 遊絲ハ日脚ノチラチラスルヲ云 (江湖風月集聞書・66オ：柳田1972)

b. Munega dacudacu suru. (日葡・p.69)

c. たじたじする「あまりたじつくもあしかるべし (虎明狂言・文荷)^(注8)

1節では、こうした「擬態語＋スル」の「スル」を「軽動詞」とする記述を紹介した。しかし、古代語における「スル」の振る舞いに鑑みると、自動詞としての用法の一部と見て何ら問題のないことが分かる。もちろん、現代語の「スル」の「本来の用法」を他動詞と見るなら、動作主主語ではない「擬態語＋スル」における「スル」に対し、別のカテゴリーを与える可能性も生じよう。しかし、古典語における「擬態語＋スル」の「スル」については、これを「軽動詞」とする妥当性は認められないように思う。

このような見方は、軽動詞のもう1つのタイプとして挙げられた、「青い目をしている」でも同様である。「形容詞連体形＋名詞＋スル」というものであるが、古代語の段階でも用いられている。小田(2015)^(注9)に挙げられた以外の用例を、いくつか掲げておく。

(22) a. いと様態こまめかしう、かどかどしきかたちしたる人の(紫)

b. 二藍の指貫に、あるかなきかの色したる香染の狩衣(枕・34段)

c. 心やすくうつくしきさましたまへり(源氏・若菜上)

(22a)は「理知的な容貌をした人」、(22b)は「あるかないか分からないような色をした丁子染の狩衣」、(22c)は「(女宮は)かわいらしい様子をなさっている」のように、現代語訳を充てるなら「～をしている／～をした」のように、ヲ格を伴って訳したいところである。ヲ格をとる他動詞であるのに「スル」には動作性が認められない、ということで「軽動詞」の命名がなされるわけであるが、古代語の例において注目されるのは、名詞と「スル」の間に助詞が標示されていないという点である。すなわち、「ヲ格をとる他動詞」という点からまず、疑ってみる必要があるわけである。

この手がかりとなるのが、(22c)のような「さま」について、助詞が標示された『源氏物語』の例である。以下に、(23)として掲げる。

- (23) a. いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば (源氏・桐壺)
 b. らうたげに心苦しきさまのしたまへれば、えも恨みはてたまはず (源氏・宿木)

(23a、b) のように、従属節内での主格を示す「の」が用いられている。^(注10)

(18～20) の例で見てきたように、「スル」が主語の状態を表す「名詞＋ガ＋スル」の形は、古典語においてよく用いられている。すなわち、いわゆる属性叙述文として、「スル」の後に「タリ／リ」を伴った (22) の諸例に関しても、やはり自動詞としての用法の一部と見るべきであろう。したがって、現代語の「青い目をしている」に相当する古代語の形式についても、「軽動詞」を認める必要はないものと考えられる。

最後に、自動詞としての「動名詞＋スル」についても見ておこう。

- (24) a. それだにをりをかしうなどある、返事せぬは心おとりす (枕・23段)
 b. その君出家して往生したまひにき (大鏡・時平)
 c. 襪に打敷つきて行くに、まことに大地震動したりしか (枕・104段)

(24a) には和語、(24b、c) には漢語の例を掲げた。動作・行為を行う他動詞としての用法が「スル」の本来の用法であれば、これらを「軽動詞」とする可能性もあろうが、すでに見たように、古典語の「スル」は、作用・状態を表す自動詞としての用法も一般的に認められる。やはり、これらに「軽動詞」の用語を与える必要はないであろう。

以上、本節では、古典語の「スル」が、自他に関わらず、動作・作用・状態を広く一般的に表すものであることを確認した。

4. おわりに

以上のように、本稿では、まず古代語の補助動詞「す」について記述し、その歴史的展開についても記述した。次いで、本動詞「す」の振る舞いを記述し、その観察をふまえると、古典語に軽動詞「す」を認める必要はないことを述べた。

ただし、本稿の主張は、現代語における「軽動詞」という見方に基づく分析をすべて否定するものではない。現代語の「する」は、確かに他動詞が本来的な用法と感じられるため、「本来的でない」用法に対して何らかのカテゴリーを

与えることはあってよいと思う。このことはむしろ、我々に次なる課題を示してくれている。すなわち、「スル」は、古代語では自動詞・他動詞ともに幅広く表すものであり、むしろ、補助動詞の存在をふまえると自動詞が基本であったと考えられるところが、現代語では他動詞が基本になっているのである。この歴史的变化はどのように記述されるであろうか。この興味深い課題について、引き続き考察していきたいと思う。

(注1) 動詞連用形に後接する補助動詞について、青木(2020)では、敬讓の意を表すもの以外にも、時間や可能(不可能)、程度など、外延を広く定めている。

(注2) 使用コーパスは、国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』(バージョン2022.10、<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>)。以下同じ。

(注3) 「死にもせず」は、『CHJ』では[「死ぬ」連用形+係助詞+「為る」]とされているが、以下に掲げる「死にす」「枯れす」は[名詞+「為る」]と解析されている。
・いさなり海や死にする山や死にする死ぬれこそ海は潮干て山は枯れすれ(万3852)

阪倉(1966:114)に「すずろなる死に^をすべかめるかな(竹取)」の例が挙げられるように、明らかに名詞と見るべき「死に」の例が存するがゆえの処置かと思われるが、これらについては「動詞連用形+す」と見るべきであろう。

したがって、上代の「動詞連用形+す」には、「忘れ/絶え/生え」の3語に「死に/枯れ」の2語が加わることになるが、無意志的な非対格自動詞に限られるという本稿の主張には抵触しない。

(注4) 小田(2015)の(1d)は、こうした中古における「動詞連用形+助詞+スル」をふまえたものであろう。助詞を介したもののみを「補助動詞」とするのは、中村(1995)、吉田(2018)でも同様である。

注3でも触れたように、前接する動詞連用形を名詞と解釈する可能性は常に考慮する必要があるが、本稿では個々の用例に即して、『CHJ』を拠り所としながら適宜判断を加えた。

(注5) 古代語における「動詞連用形+動詞」では、後項が補助動詞に限らず、語彙的意味を保ったものも係助詞の介入を許す。

・長き夜をあかしの浦に焼く塩のけぶりは空に立ち^やのぼらぬ(大和・77段)

・いらへもせず、起き^も上がりたまはねば(落窪・巻1)

「立ちのぼる」「起き上がる」のようなタイプに助詞が介入した例は現代語では違和感が大きく、したがって複合動詞における助詞の介入は、次第に補助動詞タイプへと限定されていっていることが分かる。

(注6) 動詞連用形に直接する補助動詞「す」は、上代から中古にかけて打消し表現句での使用に限定されていくため、複合動詞後項としての補助動詞一般に起こる歴史的变化の先駆けであったと見ることもできよう。

(注7) もちろん、「を」を表示しない「動名詞+スル」も数多く存する。

(注8) ト書きの例。

(注9) 佐藤(2003)、影山(2004)に拠り、①名詞が「形」「色」「性質」など「対象の根

源的属性を表す」ものである、②名詞は修飾語を必ず必要とし、名詞句全体が指示性のない不定名詞句である、③「スル」はテイル形（連体修飾でタ形。古典語では「タリ／リ」形）である、④主語の属性を描写する属性叙述文である、といった特徴を兼ね備えたものを拾った。

(注10) (23a) は、小田（2015：374）で「をに通うの」として挙げられるものであるが、現代語の感覚を当てはめたものと言わざるをえない。中村（2022：463-491）でも指摘されるように、古代語ではこうした「連体修飾＋さま＋スル」における「スル」は、自動詞と見るべきであろう。

中村著で取り上げられる形式には、「小君出でくる心地すればやをら出でたまひぬ（源氏・空蟬）」「ただ時々うち嘆くけはひする方に寄りかかりて（源氏・花宴）」のような、「連体修飾＋心地／けはひ＋スル」なども含まれる。これらは、特定の時間・場所における動き（出来事）を描いた事象叙述文であるので、本稿とは射程が異なることを付言しておく（注9も参照されたい）。

出典と使用テキスト

万：万葉集，竹取：竹取物語：伊勢：伊勢物語，大和：大和物語，落窪：落窪物語，源氏：源氏物語，枕：枕草子，紫：紫式部日記，土佐：土佐日記，蜻蛉：蜻蛉日記，古今：古今和歌集，後撰：後撰和歌集，大鏡：大鏡，今昔：今昔物語集，宇治：宇治拾遺物語，平家：平家物語……新編日本古典文学全集（小学館），天草平家：天草版平家物語……江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明治書院），虎明狂言：大蔵流虎明本狂言集……大塚光信『大蔵虎明能狂言集 翻刻註解』（清文堂出版），日葡：日葡辞書……『エヴォラ本日葡辞書』（清文堂出版）。

参考文献

- 青木博史（2013）「複合動詞の歴史的变化」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端——謎の解明にむけて——』pp.215-241，ひつじ書房。
- 青木博史（2020）「動詞連用形＋動詞」から「動詞連用形＋テ＋動詞」へ——補助動詞の歴史・再考——」青木博史ほか（編）『日本語文法史研究 5』pp.197-226，ひつじ書房。
- 小田勝（2015）『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院。
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房。
- 影山太郎（2004）「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4-1，pp.22-37，日本語文法学会。
- 阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店。
- 佐藤琢三（2003）「「青い目をしている」型構文の分析」『日本語文法』3-1，pp.19-34，日本語文法学会。
- 鈴木雅子（1984）「擬声語・擬音語・擬態語」『研究資料日本文法 4 修飾句・独立句編』pp.159-201，明治書院。
- 中村幸弘（1995）『補助用言に関する研究』右文書院。
- 中村幸弘（2022）『文構造の観察と読解』新典社。
- 柳田征司（1972）「抄物に見える擬声擬態の副詞」『愛媛大学教育学部紀要 第2部 人文・社会科学』4-1，pp.27-43，愛媛大学教育学部。
- 吉田永弘（2018）「助詞の介在——補助動詞「す」を中心に——」青木博史ほか（編）『日本語文法史研究 4』pp.43-63，ひつじ書房。

付記

本稿は、AA 研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2022年度第5回研究会（2023年1月29日、オンライン）での口頭発表に基づくものである。発表席上、また、発表後において数多くの貴重なご意見を賜ったことに対し、心よりおん礼申し上げる。

また、本稿は、JSPS 科研費21H04349（基盤研究 A 「『抄物コーパス』の構築とコーパスを応用した日本語史研究」）、および国立国語研究所共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」による研究成果の一部である。

（あおき ひろふみ・本学教授）